

---

# デュアル・シュール

西崎想

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デュアル・シユール

### 【NZコード】

N4377Z

### 【作者名】

西崎想

### 【あらすじ】

ニューヨークに一人の男が占い師をしていた。

男は、何かを待っていた。

そして、その待っていた、女が彼の前に現れた。

世界崩壊の序曲。それを止めそうとする二人の戦いが始まる。

## プロローグ -崩壊のカウントダウン-

西暦2091.1.1ユーローク。

繁華街、裏通り。

ここは、浮浪者、酔っ払い、不良、など、気持ちの宣しくない、者たちがはびこっていた。

その、もう一つ下の、階段を降りたところにある、広場。その一角に、ポツンと、テーブルに布をかけてあるだけの、簡単な店構えに、一人の男がいた。

彼は、どこか暗い表情の中に、一筋の光明が見える。

その男は、誰かを待っていた。

誰？

それは、その男本人にだつてわからない。  
男は、長い布……ローブを身にまとっていた。

きやつきやつ

何人かの、女の子たち、高校生が団体で通りかかった。

「ねえねえ」

その中の背の低い女の子が、ローブの男を指さして、

「あれ、占い師ー？」

「えー？なんかこわあ～い

「流行つてないんじやない？」

「いこいこ」

きやつきやつ

そう言いながら、女子高生たちは去つて行つた。  
男が待つてゐるのは、彼女たちではないようだ。

「今日も、またダメか？」

そう、男は湿つぽく思つていた。

その時だつた。

カツカツ……

ヒールの音を響かしながら、一人の女が歩いてきた。  
その女は、この通りには、おおよそ似つかわしくない、綺麗な姿  
をしていた。

女は、男へ近づいて行く。

そして、前まで来ると、歩みを止めた。

「貴方、占い師？」

「……ええ」

男は、ぶつきらぼうこ、それだけ言つた。  
「私のこと……占つてくださいさる？」

「……それが仕事ですから」

じつと、手相を見る、男。

「この人、変わつてゐるな……」

そう思いながらも、

「恋愛運が良いですね」

ほとんどでたらめに、男はそう言つた。

「まあ、ほんと?」

その割に、女は、良い反応をした。

そして、

「その、水晶玉。使わないの?」

そう言つた。

男は驚いて、女を見た。

「ねえ、どう?」

その女の角度からして、それは見えない角度にあつたのだ。  
-占つてみるか……。

そう思い、男は水晶玉を机に置いた。

……!?

「う……」

男は、そのイメージに眉をしかめた。

「ねえ、どう?」

「……」

男は一息ついて、

「世界は、崩壊に向かいます」

「へえ……? 怖いわね」

「私は貴方を、待つていました」

「あら、ほんと?」

女は少し笑みを浮かべた。

「私と……一緒に……来てくださいます?」

「あら? ナンパ?」

男は下を向いた。

そして、商売道具をつまみ出した。

「いかがです？」

その女は、男にやうごねると、

にやあ～と、笑い、

「いいわよ」

そう、言った。

クラフトとジーン

「俺はクラフト。君は？」

私? うん

何か躊躇して いる女  
少し考えて

「いいわ、私はジーン」「ジーンか、よい名だ」

そういうクラフトが言つて、

「本当? そんなこと言つてくれたの、貴男が初めてよ  
クラフトは、そういうわれると、下を向いた。

「貴男、もつ、その布、取っちゃいなさい」  
ジーンは、わざこなや呑や、クリフトのローブに手をかけた。

せれん！

11

「あらあ、結構いい男じゃないの？」

クラフトは、ロープの下の姿をあらわにされた。

服は、ヨーロッパのジーンズと、Tシャツ。髪は少し伸びていて、

「なんか、良い服でも来たら、もっといい男になりそうね」

そんなジーンは、プロンドの髪とスレンダーな体をしていて、その体型をフルに生かした、ピチッとした服を着ていた。

「そうね、私が買つてあげる」

「ううう」と、ジーンは、クラフトの腕をつかんで、町へ繰り出した。

「うううなんて、ううう。」

そう言つて、ジーンが立ち止ったのは、ブランド品が並んでいる、見るからに高そうな店。

「入るわよ」  
「ううう」と、ジーンは、店の中へ、

「いらっしゃこまか」

店内は明るく、店員は、丁寧に斜め45度に身体を曲げてお辞儀をしていた。

「貴男のお好みは？」

「……俺は」

そういうと、クラフトは考え込んでしまつた。

「あら、貴男優柔不斷？いやあねえ」

ジーンはそんなクラフトを見ると、自分で、パパッと服を選んだ。

「ううう～こんなのは」

「そうだな……」

「じゃあ、これは？」

「…… もう少し、かつてここのが」

ジーンはあーっと息を吐くと、

「ああんた、優柔不断のくせに、選り好みするの? もう少い」

「……いや、もういつもわけじやあ」

そう言われると、クラフトは口をつむんでしまった。

「あら~あ、『あなたがい』?」

「いや……君が選んだのでいいよ」

「そお!」

じゃあ、とこいつとで、ジーンが服を選んだ。

「こらんなのは?…… と、良いみたいね」

クラフトの表情を見て、ジーンがもう言いつぶ、

「じゃあ、これ、カードで」

はい、と素早くカードを店員に渡した。

革の上下にブーツ、クラフトは、満更でもないようだ。  
それを見て、ジーンはカードを出した。

外に出た一人。

ジーンは、駐車場に来たところで、止まつた。

「や、いじよ」

すると、クラフトは、ジーンに抱き着いた。

ドキッとするジーン。

「ク、クラフト?」

「君は、何を知っているんだ?」

「え?」

「なぜ、俺の所に来た!」

語氣を荒げるクラフト。それを聞いたジーンは戸惑つた。

「な……なに怒つてんのよ」

「君と会つた時から、ずっとつけられている

「え……!?」

辺りを見ようとするジーン。

「見るな!」

小さい声でしかし鋭く、クラフトは言つた。

「君は、銃を持つてゐるか?」

「え、ええ」

「走れ!」

その声に、ジーンは走つた。

ダーン！

銃声が響く。

「きやああ！」

そう叫びながらも、ジーンは自分の車にたどり着いた。

「よしつ！」

クラフトは、銃で応戦しながら、ジーンの所へ、

「ちょ、ちょっと！ なあによおう！」

「君の事を歓迎しているんだろう！」

そう言つて、クラフトは、ジーンに、

「車のキイだ、開けるんだ！」

「え、ええ！」

ピー

カチッ……

急いで入る二人。

「はやく！」

その車は、すごい速度で、走り出した。

## カーチェイス

車は走り出した。

「どうこう」とへ……ねえ……」

ジーンはクラフトに聞く……とこいつより、相手に聞きたいのだろう。

クラフトは、一回、ため息をつくと、

「俺には、解らない」

「もううつー」

その時だった、

ガツン！

「きやああ！」

車が大きく揺れた。

「あいつら……！」

車で、クラフトたちの車に体当たりをしてきたのだ。

「ちよつとおーなんなのよおつ！」

ジーンが叫ぶ。

「ジーンー車の運転をうまくしろよー！」

そう叫び、クラフトは窓を全開にした。

「な、なにすんの？」

「うう……するのやー。」

鳥を出来るだけ外に出して、拳銃を持つ。その拳銃が火を噴いた。

ガーン……！  
ガーン……！

「きやああ！」

車体が揺れた。

「しつかり、運転しろ！」

クラフトが叫ぶ。

「なによおう！もうつー！」

ジーンは今にも泣きだしそうに叫ぶ。

相手の車は、その間に、クラフトに銃で応戦。

ダダダダダッ……！

「クラフト！」

「大丈夫だ！しつかり運転しろ」

クラフトはそう言い、銃を構えた。

ガーン、ガーン！

そのうち、道は、山へ。

「右にカーブしてくれ！」

「え、ええ！」

グウン……！

ジーンの反応が遅かつた、のが、幸いした。  
車がカーブするのが、遅いため、相手の車は対処しきれなかつた。

その車はガードレールを突き破つた。

そのまま、相手の車は崖の下へ。

「やつい！」

「ふう……良い車だ、なんていうんだ？」

「アストンマーテインよ」

街のカフェテラス。

そこに、クラフトとジーンはコーヒーを飲んでいた。

「ふう……ねえ、クラフト」

「……ん？」

何かを言いかけたジーンだつたが……、  
クラフトはシガレットケースを出した。

「あんた、タバコも吸うの！？」もおつ  
あきれた調子にジーンが言ひ。

「仕方ないだろつ」

「もおつ、アストンマーティンもクラッシュシューしちやつたしい」

「……ジーン、君はなんなんだ？」

「あ……あの、私ね？……マフィアの父がいて……」

クラフトは、それを聞いて、口ヒーを吹き出しそうになつた。

「マ……マフィア……か」

「そ、そつな、あのね、それでこんな  
「気楽な生活をしていた……か？」

「そ、そうそう、でも、私、知つちゃつて……」

「世界滅亡を……か」

ジーンは身を乗り出した。

「私、好奇心旺盛で……ふふ」

「そうか……ふふ」

一人は、少し笑つた。

「しかし、どこに世界滅亡なんて事態がくるんだ？」

クラフトは、周りを見回した。

「そうねえ……」  
ジーンもそれにならひ。

「まあ、知りたきや、……これが、ある」  
そう言つて、クラフトが、自分のスポーツバックから取り出した  
のは、水晶玉。

「それで……なんかわかるの？」

「ああ……」

そして、クラフトは水晶玉に手をかざして、皿をつむつた。

……

「なにが解るの……？」

そんなジーンの言葉も聞こえないほど、クラフトは集中していた。

サアアアア……

……これは

水……？

水の音か……。

なんだ……？

ザーヴー……、

滝……？

……」は……アメリカの……。

「ふう……」

そう言つて、クラフトは瞑想を止めた。

「なんか、解つた？」

「……ああ、しかし……少し……疲れ……」

「ふう……、

ともう一度深いため息をすると、クラフトは寝むつてしまつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4377z/>

---

デュアル・シュール

2011年12月17日18時49分発行